

新たな東北圏広域地方計画策定に関する第8回有識者懇談会 議事要旨

日時：令和6年3月14日（木）

13：30～15：30

場所：東北地方整備局

9階会議室A・B（WEB併用）

出席委員

姥浦道生委員、小笠原敏記委員、舘田あゆみ委員、田中麻衣子委員、中出文平委員、浜岡秀勝委員、三浦秀一委員、宮原育子委員

1. 開会

2. あいさつ

3. 議事

- ①第三次東北圏広域地方計画 中間とりまとめ（事務局案）について
- ②その他

4. 閉会

主な発言内容

議事

事務局より議事について説明を行ったのち、中間とりまとめ（事務局案）に関する意見交換が行われた。各委員から出た意見は以下のとおり。

- ・広域連携プロジェクトは、だいぶ整理されて読みやすくなった。
- ・基本方針2について気になったことを述べる。1つは、資料1のP32に「人と自然が育んだ美しい「森里川海」の原風景の継承」とある。自然的土地利用と都市的利用の塩梅を考えたときに、山は自然的土地利用が大半、まちは都市的土地利用が大半、里は両方がある。
- ・「川」は、流域圏で見ると面的な意味合いもあるが「森、里、まち、海」をつなぐもので、これらとは性格が異なるため一緒にして良いのか気になった。
- ・特に、自然環境、水環境、景観の保全としたときに、自然的土地利用だけでなく、都市的土地利用でも、都市緑地や景観を検討することは考えられるだろう。30by30でも似たようなことが言われている。
- ・2点目は、国土管理と関連するが、資料1のP32、25行目の「環境と共生する国土利用・管理」についてである。32行目に「所有者自ら経営管理が実施できない森林など」と書いてあるが、全体的に人口が減少し担い手が不足して、管理が行き届かないところが増える切迫感に対し、環

境と共生する甘い未来が想定されているように感じられる。森林については、経営管理の委託を受ける、手をつないで、というような前向きな言葉が並んでいるが、逆に放っておいて良い自然環境もある。例えば白神山地等、大変良い自然が東北にはある。そういったところも含めた表現に直して欲しい。農村部についても同じである。

- 以前に比べると、人口減少を真摯に受け止める等、東北らしさが出てきた。ただし、文言で書き足すだけでなく、実体としてどういう問題があって何が起きているか考えていく必要がある。
- 能登の問題は、孤立集落の高齢化率が7~8割といった高いところが多い。能登は半農半漁が多い。東北の場合は半漁とまでいかないにしても、生業として成立するか、集落として存続できるのか。自然的景観と不即不離の問題のため、考えることが望ましい。
- 自然環境については、他の委員に同じである。
- 集落について、現在はDXを使って頑張ろう、という話を中心になっている。ここも場合によってはどのように撤退、集約化するかを考える必要がある。その意味で最先端、ということ考えると、問題を打ち出しつつ具体的には個別的にそれぞれのところで考えていく。これらと、今後の方針を含めて書くべきだと思う。集落の集約化についても、住民との十分な対話が大前提となるが、積極的な記載が望ましい。
- 参考資料 3、P4 にある写真について、「げんき市場」は漢字表記の「元気いちば」であるので修正をお願いしたい。
- 資料1のP37、31行目に「非化石エネルギー」という表現がある。今までも使われていたかもしれないが、32行目以降ではその文言は出てこない。一般的に再生可能エネルギーと呼ばれるので、一般の方は非化石エネルギーとは何か、と思うのではないか。
- 25行目で「多層的なエネルギー供給構造」とあるが、項目が羅列的に並んでおり、多層的が何を指すのか分かりやすくした方が良い。
- 28行目には「エネルギーに関わる戦略的取組」という表現がある。P39以降で、前半は割と技術開発のように書かれている一方、地産地消や生物多様性のように、幅広い内容が記載されている。戦略的という言葉がざっくりしており、何が戦略的か分かりにくい。全体として地域の話を整理する必要があるが、分かりにくくなっている。カーボンニュートラルについても、地域の戦略が分かるようにした方が良い。
- 青森県知事が風力発電に対して批判的な姿勢で、規制的なことをしようとしている。岩手県でも規制的なゾーニングを掛けようとしている。宮城県でも条例を定めており、東北全般で反発が出てきている。そのようなことをくみ取った表現が弱いと感じられる。カーボンニュートラルと地域の共生については、国土形成計画という観点で具体的に書いた方が良い。
- シンプルになって読みやすくなった。
- 基本方針4について、外部人材と関係人口が似たワードだが、イコールとはならないところが気になる。
- 資料1のP45以降、第10節、第11節では「人材が不足している、担い手不足である」との記載があるが、地域で活動していると思うことがある。最近では地域も企業も選んでもらわなくてはならないため、セミナー等の具体的な施策に取り組んでも、地域の人がセミナーに参加しなかった

- り、分かった気になったりしている、というようなことを耳にする。
- ・山形では、自治体も企業も、選ばれるように努力している。特に、人材本人に話を聞くことに取り組んでいるところが多い。
 - ・セミナー等の既存の方法で取り組んでも成果が出ないと感じている。その中で、人材に選ばれるようにするために、直接話を聞く場を設ける方法は、インパクトが出ると感じている。10 節、11 節で、そのようなやり方をすることが重要だと思う。やり方の一つとして伝えていくことはできないか。
 - ・資料 3、P2 の中間とりまとめの概要について、回転軸で書かれたことは良い。三つある赤の丸が独立しているが、特にデジタルとリアルとの融合は、青丸と同じように表現した方が良いのではないか。東北圏にも関わることなので、輪が重なるような形にできないか、という印象を受けた。
 - ・基本方針のキーワードにあって、赤の丸のキーワードにはない表現もある。左と右の統一感がないのではないか。
 - ・資料 1、基本方針 2 で「グリーンな国土づくり」でだけ「国土」という表現が出てきている。他では東北圏と書かれていて、なぜここでは国土なのか。エネルギーを他圏域に供給する意図か。
 - ・資料 1 の P28、地震対策「都市圏を中心に交通機関が」については、都市圏がどの程度の規模か分かりにくい。
 - ・また、災害対策に関する記載で、豪雪に対する対策が書かれていないことが気になった。
 - ・付け加えた文章となっていてかなり長い文章があるので、今後精査することが望ましい。誰が対象か分かりにくい。
 - ・ネイチャーポジティブ等、難しい言葉が多い。補足資料等がないと伝わりにくいだろう。
 - ・全体的にはシンプルになって分かりやすくなった。
 - ・デジタルという言葉が、当初案に比べて増えた。東北圏は DX 化ランキングで下位にとどまっている。デジタルに取り組む意気込みが伝わって良いと感じた。ただし、使いすぎることでの陳腐化しないか気になった。
 - ・「森里川海デジタル」という用語が出てきた。キャッチーな雰囲気が良いが、具体的に何に取り組めば良いのか、どのようなアクションで、どのようなイメージになっていくのか、具体的にわかると良い。
 - ・また、Well-being という用語が出てきた。近年流行っており岸田総理も使っている。本来の Well-being の使い方と言うと、より大きな概念をイメージするが、ここで使う場合は何を指して Well-being の表現を使うのか説明があると良い。
 - ・参考資料 2 の P2 について、内容が整理されてスッキリしたと感じた。一方で、広域連携プロジェクトが 1 つとなってしまったが問題ないか。
 - ・東北圏らしさとして、何点か紹介いただいた。東北の特徴として、日本海側と太平洋側の 2 面活用とある。それをうまく実現するために、太平洋側では仙台という政令市、日本海側に新潟という政令市がある。これは東北だけの特徴だと思う。これを強調することで「東北圏だから」という意味合いが色濃く出ると考えられる。
 - ・参考資料 3 の P3 について、体系案として全ての基本方針と戦略的目標が示されている。以前の

懇談会でも議論広域連携プロジェクトは、地域間連携だけでなく戦略目標間や基本方針間の連携の可能性もあるのではないかと、という話があったかと思う。

- ・新しいエネルギーの作り方を考えるという話があった。これは基本方針3の広域連携プロジェクト5に該当するだろう。一方、プロジェクト4では、そのエネルギーを使って地域をよくしようという内容であり、プロジェクト同士が連携しているように思われる。
- ・また、コンパクト+ネットワークに関して、都市間で考えると、基本方針3の交通ネットワークに該当すると思うが、コンパクトシティについては生活に関連するので、基本方針4に該当するのではないかと。重複の可能性のある施策をどう整理するかも課題であると感じた。
- ・これからの東北の将来を考えた時に、外国人はインバウンドという形で来ていただく想定だが、外国人が働くという姿はどう考えているか。関東圏では検討が進んでいると考えられる。東北圏ではまだまだだと思いが、少子化によって働き手が減る中で、外国人が働くための環境づくりも求められる視点であると考えられる。確認をお願いしたい。

(座長)

- ・修正前と修正後の内容を見て、プロセスはよく分かった。
- ・他の委員の意見のとおり、テーマによっては別の内容とつながるので、そこをどう見えるようにするか、改めて確認しておくべきと感じた。
- ・他の委員からは専門用語が多いとのことであった。できるだけ平易な言葉を使うように、例えば巻末に用語リストを入れる等の工夫も必要かもしれない。できるだけ様々な人の目に触れる資料として分かりやすさを心掛けることが望ましい。
- ・東北らしさという部分について、東北の圏土、地理的な位置関係自体が東北らしさを生み出していると考えている。日本海と太平洋に囲まれており、脊梁山脈として中央に連続する火山列がある。それらが東北の温泉等の恵みを生み出している。豊かで地理的に恵まれた土地だからこそ、これからもこの自然をつないでいく、自然を愛でて守っていく、東北圏の資源を使って圏土を盛り立てていく、といったような内容も書き込めると良い。
- ・計画前半は東北全体をどう守っていくか、という姿勢であるのだと思う。計画には攻めと守りがあるとすると、国土形成計画で一番の攻めはリニア新幹線を軸として、守りは防災である。
- ・東北で言うと、2面活用の交通ネットワークではないか。東北には2つの政令指定都市だけでなく、特定重要港湾も国際空港もある。陸上交通では、新幹線も高速道路もある。それらをどう生かしていくか。新しいものを多く作ることは難しい時代であるため、今あるものをどう効果的につないで使っていくかを第8節で書くことが望ましい。
- ・地域生活圏についても、自分のところだけでオールインワンで取り組むということではないのでもう少し発展させられると思う。これらは第8節、第9節、第13節にあたるだろう。
- ・Well-beingとは何か、そのような言葉を使わなくても表現できるのではないかと。
- ・「森里川海」をデジタルでどう表現するのか。「川」のデジタルが何を指しているかよく分からなかった。次回の懇談会までにブラッシュアップしていただきたい。
- ・全体的に意欲的にはなっているが、まだまだの検討の余地がある。まだ期間はあるため、検討を進めていければと思う。

- ・参考資料 3 の P7、地域と共生した脱炭素社会について述べる。
- ・左側が非化石エネルギーで、右側が地域資源を示している。これを見ると左側の非化石エネルギーウエイトが全体の 2/3 を占めていて大きく感じる。そのため、もう少し地域に根差した再生可能エネルギーや脱炭素社会を作る、ということを見せたい。少なくとも両輪として見えるように出していきたい。
- ・国土的な位置づけの中で、東北が首都圏に向けたエネルギー供給エリアにならなくてはならない、ということをおっしゃっていると思うが、東北圏としての自立的なエネルギー等が地域の産業につながる、ということをしっかり記載して欲しい。
- ・資料 1 の P24、18 行目について述べる。今回の能登の被災について、その後の国・民間等いろいろなレベルの活動を踏まえると、後世への伝承は「孫に伝えていく」というイメージで捉えられがちではないか。それと並び、次の被災地でどのように生かしていくのかも重要と考えている。
- ・伝承の表現の中には、東北の中でつなぐだけでなく、国内外にも実際に使って生かしていく、その拠点となるのが東北圏である、ということが分かると良い。
- ・自助、公助について P30 を見ると、「公助には限界があり」と記載されており、公助は何もしないのかという印象を受けかねない。公助のみならず、自助・共助を強化する、というような表現にした方が良い。

(座長)

- ・いろいろな計画を立てて実践していくことが重要であるが、東日本大震災や能登地震のような、地域に突発的に起こる出来事の際に、既存の考え方やルールを前面に押し出すと、命の救出や生活の再建がうまくいかないことがある。東日本大震災や能登についてもそうであると思う。
- ・そうした枠組みを外しても、地域を維持していくような考え方や方法が、省庁の横串連携、ルールをある程度柔軟化し、規制を外す。その中での上層部の意思決定の仕方、こうしたことが計画をより実効的に、困っている人につなぐことが出来ると思う。ルールを外していくような事態が起こった際は、柔軟にやっ払いこうという意思が見えると良い。
- ・今後、自然環境もハードになってくる。東北圏も東日本大震災で終了したわけでない。今後も様々な状況の変化がやってきたときに、決められたルールの中で守ってだけでなく、ルールを外して新しいことを創りながら守っていくという状況も考えられる。そのあたりの考え方、決まりごとだけで終わらせないようにするべきである。
- ・東日本大震災時の櫛の歯作戦のように、大胆な対応の仕方が、沿岸部の人を救う大きな力になった。そのような状況になった時、一緒にやっ払いこうという住民の意識を醸成していく内容をどこかに入れるのが望ましい。
- ・座長の意見のように、計画は平時の計画として作るが、有事の際には対応できるような柔軟性がなくてはならない。計画を作成したらそれをきちんと守っていかなくてはいけないと思いがちだが、災害時に限らず枠組みが変わったときに、計画をいつでも見直しができるなど、柔軟に対応できることが望ましい。
- ・しかし、国土形成計画ではそこまで対応しきれていない。一方で、今回の東北圏の計画であれば第 3 章で「潮流の〇〇に対応する」と記載がある。それぞれの潮流に対して複数のプロジェクト

が対応しているとする、このような事態になったときには、「これを組み合わせてできる」ということを前もって想定していくことができるのではないか。

- ・ いざ起きてから考えようとしても難しいが、今のうちに何かあった時にどうすれば良いか、心構えとして、計画に内包しておくが良い。

以上